「自分の言葉で語り合う」言葉のやりとりがある学習
～単元学習「おとなって何？」シンポジウム～

藤原一恵
鳥取大学附属中学校　国語科
E-mail：fujiwara_kz@fuzoku.tottori-u.ac.jp

Kazue Fujiwara（Tottori University Junior High School）：**Learning of lively verbal interactions with "conversation filled with students' own words" — Course unit learning：A mock symposium entitled "What are adults?"**

要旨 —　義務教育最終学年として，世の中で求められるコミュニケーション力を身につけるための学習として，シンポジウムを行った。「話したい，聞きたいと思える話題」「話せる雰囲気づくり」などの教師のやりくりと「どう話せば分かりやすく伝えられるか」「時間内で協力して意見をまとめる」といった生徒のやりくりを仕掛け，その場で考えたことを伝え合う学習である。その実践と成果・課題を報告する。

キーワード —　シンポジウム，グループ学習，言葉のやりとり，論理的思考力

Abstract — As the final grade of compulsory education, we held a mock symposium as a learning to acquire the communication skills required in the world. In the symposium, I first provided "topics that would elicit students' desires to talk about, or to listen to" and "atmosphere easy to talk" to students as a device. I also encouraged students to consider "How should we do to present a talking thread more simply and effectively one another?" and "What is the better way to assemble various opinions within a limited time?" It is learning in which students communicate what they thought on the spot one another. I will report its practice, results, and issues emerged.

Key words — Symposium, group learning, discussion, logical thinking ability

1. はじめに
1.1 国語学習の課題

国語の学習は，生きていくために不可欠である。それぞれが，自分の望む幸せな人生を送るためには，自分の頭で考える力と，言葉を正確に受けとり発信する力を十分備えて社会に出て行く必要があるからである。

また，都市化，国際化により見知らぬ人や外国人との意思疎通，少子高齢化により異なる世代との意思疎通，日々進化していく情報機器を介しての間接的な意思疎通などにおいて，多用で円滑なコミュニケーションを実現するためには，これまで以上の国語力が求められるといわれている。

これからの時代を担って生きていく生徒たちには，今まで以上のコミュニケーション力を求められているため，国語の授業においてその力をつけるための言語活動を，より多く取り入れていく必要がある。

1.2　生徒の実態と課題

入学時から持ち上がった学年である。

様々な教材に触れ，読み取ったことや作品について考えたことを文章化していく学習を昨年度は積極的に取り入れてきた。「読めているか」を確かめるために「書く」というのがねらいであった。自分の考えを書くためには，テーマや目的に即して正確に読み取ることや，自分なりの意見を持つことが必要である。その手助けとなるよう，テーマについて更に興味を持ったことを調べたり，同じ視点で書かれた文章を探して自分の意見の参考にしたりすることも学習に取り入れてきた。「作文は苦手」という生徒は多い中，「書く」時間に皆が黙々と集中して書くことができたり，互いの文章を読み合うことを楽しんだりするよい雰囲気ができていた。ただ，教材や作文について，自分がどう考えるかといった意見交換になると，自分が感じたこと

を上手く伝えられないで会話が止まることが多かった。相手の顔を見ながら，自分の考えをその場でまとめ，話し伝えるということはとても難しく感じているようだ。

思考したことをその場で言葉を選択しながら話して伝える「言葉のやりとり」をすることで，さらに個人の思考を高めていく学習を設定しようと考えた。

2　授業実践

2.1　学習過程

学習計画（全14時間）

第１次　小説の登場人物の特徴を読み取り，その多面性に気づき，その人の魅力についてまとめる

・「握手」井上ひさし（ルロイ修道士）
・「アイスプラネット」椎名誠（ぐうちゃん）
・「新ほたる館物語」あさのあつこ
（お母ちゃんとおばあちゃん）

第２次　おとなシンポジウムの開催 ～どんなおとなになりたいか～

⑴　オリエンテーション…シンポジウムとは
⑵　私のなりたいおとな紹介
　…各自が選んだ登場人物についてその魅力をグループのメンバーにわかりやすく説明する
⑶　シンポジウム準備
　…グループとしての主張をまとめ，反論質問対策を考える
⑷　シンポジウム…討議に参加する
⑸　まとめ
　…学習を通して考えた「なりたいおとな」について各自文章を書く

2.2　学習のねらい

昨年度までの取り組みや学習の実態から，言葉のやりとりをする中で，より深く考えたり，新しい見方に気付けたりする学習を取り入れたいと考えた。

話すことが書くことよりも難しいのは，伝えたいことをその時のやりとりの中でまとめて話せなければならないからだ。書くのであれば時間をかけて自分の考えを整理し，分かりやすい言葉を予め準備することができる。聞き取ったことから考えたことを伝えるという「話す」ことは，生徒にとって一番難しい表現活動である。だからこそ，次のような力が身につくと考え，ねらいを設定した。

①論理的思考力を鍛える
②「もの・こと・人」を多角的に捉える発想力を養う
③相手を意識して話す

2.3　ねらいを達成するための「教師のやりくり」

2.3.1　「話したい聞きたい」と思わせる話題の設定

活発な意見交換がされるためには生徒の年齢や実態に応じた話題が必要である。数年後には社会へ出て「おとな」として生きていくことについて，義務教育最後の年となる３年生に考えてもらいたいと思い，設定した。

2.3.2　じっくり話せる仲間，話せる雰囲気づくり

考えたことをまとめて伝え合うには少人数の方がよい。一昨年度から生徒たちは３人グループ（国語限定）で学習を進めてきている。「国語の学習として３人のグループ編成，ただし男女混合のグループ」を編成して，はじめは簡単なコミュニケーションを取りつつ会話ができる雰囲気作りを行った。

2.3.3　話すための材料を何にするか

意見の立て方としては，単に自分たちの経験から感じたことを語るのでは，身近な大人の姿しか材料がないので，意見の多様化が期待できないし，目に見えている部分だけでは「なぜそうなのか」がわからないので，表面的な「おとな」像しか出来上がらない。ある大人の内面まで細かく触れられるのは作品に登場する人物が最適だと考え，こんな大人になりたいと思う人物の登場する作品を持ち寄り，グループで目指すおとな像を考えることとした。

2.3.4　見通しを持たせる学習

グループでの話し合いに目的意識を持たせるため，「シンポジウムとは」というオリエンテーションを行い，ゴールを見据えて話し合いができるよう進めた。「今までのような発表会ではないよ」ということが，少し生徒に意識を高く持って学習に臨ませられた。またシンポジウムに向けての準備３時間で何をするべきかを確認した。３時間と設定したのにも意図はある。「これで準備は完璧」となるまで時間をとると，「こ

れについてはこの原稿，この質問が来たらこの原稿。」という準備までしてしまいかねない。そうすると話の流れや前の人の考えを受けて自分の考えを話すという話し合いにはならないと思い，足りぐるしいと感じる時間設定にした。

2.3.5　自分たちで抽象化する練習

選んだ登場人物について分析を各自がスムーズに行うために，教科書の作品，他の物語の登場人物について分析し，「どんな人物か，それはなぜか」といったまとめをする練習を，同じ作品を読み込みながら行った。（その人物も，その後の話し合いには登場していた。）小説を読むとき，登場人物の多面性を知れば知るほどその人物に魅力を感じていくこともある。それだけでなく「なんでこうなんだろう？」という疑いの視点を持って読むと，書かれていない小説の世界に入ることができ，作品を何倍も楽しむことができる。そんな楽しみ方を知ることを期待した。

2.4　ねらいを達成するための「生徒のやりくり」

2.4.1　なりたいおとな探し

今までの読書経験の中から魅力的に感じられた人物（大人限定）を，準備するのには苦労していた。自分と同じ年代の主人公が多かったのか，「大人」が見つけられない生徒は，一から作品探しをしていた。また，友達に紹介する作品としてふさわしいかじっくり吟味しておく必要もある。そういうことで，作品の準備期間は10日程取っておいた。

2.4.2　人物のよさを伝える

やっとの事で準備した作品・登場人物について，どんなところがよいのか，どんな人物かを紹介するためには，かなりの工夫が必要であった。作品を読んだことのない者に，ストーリーも人物像も分かりやすく手短に説明するというのは，どこをどう説明したらよいのか，どれくらいの情報量でよいのか，取捨選択しながら，時には挿絵を見せ，引用を混ぜながらの工夫も必要だ。

2.4.3　具体→抽象：共通点を見つける

各自が持ち寄った人物についての魅力を挙げ，そこからグループでなりたいおとな像を考えていく。その過程で，たくさんある魅力を共通項でまとめ，抽象化していく話し合いが必要だ。

2.4.4　決められた時間内で準備

初めての取り組みのシンポジウムに臨むにあたって，言いたいことだけをまとめておけばよいのではなかった。質問にも答えなければならない。…ではどんな質問をされるだろうか。…自分たちの意見のわかりにくいところはないか。…何も知らない人が聞いたら，おかしな人物に思われないだろうか。…分かりやすい言葉や，具体例が必要だ。

考えなければならないことがたくさんありすぎて，丁寧な発表原稿など，書いている暇はなかったので，メモを見ながら直前まで打ち合わせをする姿が見られた。

2.5　授業の様子

2.5.1　準備のための話し合い

当初，自分の選んだ人物について紹介しようと，また作品に立ち返ってじっくり読み込んでしまい，話し合いが止まって各自が黙って本に向かっている場面が多く見られた。話し合いの時間なのに声が聞こえない…静かな時間が流れてしまっていた。ただ，語り出すと活発なやりとりが見られた。分かりやすく説明しようと言葉を選び，繋ぎ，組み立てて話す姿が多く見られた。ただ聞くだけでなく事前の練習で行ったようなまとめ方を意識してメモを取りながら聞き取り，話し合いがスムーズに行くよう工夫していた。挿絵や引用を混ぜつつの紹介もでき，「考えながら」言葉をつないで話をしていた。初めの話し合い授業後，互いの作品を交換して持ち帰って読むグループもあった。

自分たちの意見がまとまった段階で，「どんな質問をされるか。」という予想がつかないグループが多く見られた。違う視点で考えてみることはまだ難しい。

2.5.2　シンポジウム

シンポジスト5名，司会1名が全体に対面し，フロアーは座席のみの形態で各学級2回行った。シンポジストはグループの代表として，メモを見ながらまとめた意見をスムーズに話すことができた。今までの学習では，発表となると発表原稿を用意し，それを読み上げるばかりであったが，この度は構成したり言葉遣いや言い回しを工夫したりと，相手を意識し論理的に話ができる生徒が多かった。

各グループの発言後，質問がなかなか出ず，

司会がよりくわしい説明を求めたり，他グループに出た意見についての考察を求めたりと，「どんなおとなになりたいのか」を深く広く考えられるように進行を工夫していた。フロアーに意見を求め，フロアーが積極的に質問や回答をする場面もあり，「言葉のやりとり」が繰り広げられていた。緊張感のある中，自分の言葉でまとめて語ろうとする姿ばかりで，「分かりません」と言って終わる生徒はいなかった。

各クラスから「夢や信念を持ってそれに向かって行動できる」「積極的」「正義感が強い」「カッコイイ・おしゃれ」という意見や「経済力がある」「定職に就いている」といった意見，また，「夢を追うあまり，周りが見えなくなることもある」「ルーズ」「おっちょこちょい」「人前に出るのが苦手」「オタク・熱中できる趣味がある」という欠点とも取られる意見も出ていた。「礼儀やマナーが正しい」（子どもなら許されるが大人はだめだと思う）というのも興味深かった。

シンポジウムは，意見をまとめるというのではなく，たくさんの見方考え方に触れ，自分の考えを深めてまとめるための学習として行った。後日，これを受けて各自が「どんなおとなになりたいか？」というテーマで（夏休み課題として）作文を書いた。生徒の文章を紹介する。

私のなりたいおとな像には三つのことが必要だと考えました。一つ目は収入の安定した楽しい仕事をすることです。好きな場所で、楽しい・おもしろいと感じられる仕事をするのは、私の憧れでもあります。また充実した生活を送るためにはお金が必要だと思います。だから収入の安定した仕事に就きたいです。

二つ目は、はっきり言えて嫌われる覚悟を持つことです。率直に思ったことを言えるようになりたいです。欠点として言い過ぎて相手を傷つけてしまうという点があります。傷つけることはいけませんが、自分の意志を言えないと相手には伝わりません。自分にプライドを持ち、意志を貫けるようにしたいです。

三つ目は、しっかりした夢を持つことです。私にはまだ、この仕事に就くと言い切ることが出来る夢がありません。夢を持っている人はとてもうらやましいです。また、夢は簡単に叶うものではないと思います。どんな困難にも立ち向かって夢を追いかける人、挫折しない人になりたいので、まずはしっかりとした夢を持ちたいです。

この三つは、将来絶対なれるとは限らないし、すぐになれるものではないと思います。初めは楽しいと思っていた仕事でもついて行けなくなったり、夢がずっと決まらなかったりします。一気になりたいおとなになろうとせず、一つ一つ時間をかけしっかり考えて私のなりたいおとなになっていきたいです。何でもできる人だなと思う人でも一つくらい欠点があると思います。完璧な人を目指すのではなく、充実した生活が送れるような人になりたいです。

3 成果と課題

この学習で一番期待していたのは，予め準備した原稿を読むのではなく，メモを見ながら自分の考えをまとめて語るという姿であった。実際のシンポジウムでは準備の時間も足り苦しい中，人前で話すことに生徒は大変緊張していたが，その中で考えながら語ることができていたのは素晴らしかった。「お金にこだわる人が多いが，本当に必要なのか。」といった質問をしたり，それに堂々とグループでの話し合いの過程を踏まえて答えたりと，「言葉のやりとり」の中で論理的に考えることができていた。グループでの話し合いがしっかりとできており，他の意見をよく理解していたことが見て取れる。

また，活発なやりとりをするために司会者が，上手く意見を引き出すことが必要であった。司会者は各々がメモを取りながら聞き，出た意見からさらに考えを深めるための話題を提供し，皆が新しい発見を得られるシンポジウムにすることができていた。

欲を言えば，もっと現実的なことに踏み込んだ話し合いを期待したかった。しかし，全体での話であるからこそ「場をわきまえて」の発言にとどめておいたのかとも察することができる。

しかし，後に書いた作文には自分の将来を具体的に現実的に考えたことが書かれていた。ただ正論（よいところ）ばかりを求めるのではなく，「こんな欠点もあっていい，それも魅力の一つ。」と考えられる生徒がたくさんいた。人を多面的に捉えることができ，今ある自分の欠点も受け入れながら，将来のことを前向きに考えることができるようになったのは大変うれしい成果であった。

繰り返し行うことでさらにレベルアップしていくことをねらい，今後も人物像を読み取る学習にシンポジウムを取り入れ，より活発な「言葉のやりとり」をしながら，論理的思考力を鍛えていきたいと考えている。

4 参考

・「人を育てることばの力
—国語科総合単元学習—」遠藤瑛子（溪水社）
・「これからの時代に求められる国語力について（文化審議会答申）」